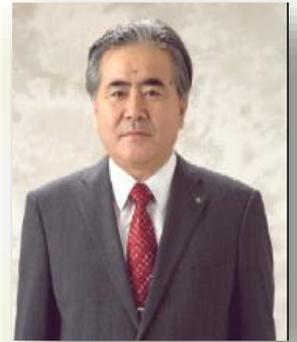


## 地方創生のキーワード “元気なジィジィ、バァバァ”

(特非) シビルNPO 連携プラットフォーム 理事  
宇奈月観光大使  
株式会社 熊谷組 社友・顧問  
大田 弘



“60年前に“過疎”、40年前には“中山間地”、そして20年前には“限界集落”という言葉が生まれた。高度経済成長の副作用として東京などへの一極集中が過度に進行し、この数年、地方創生が叫ばれているが、一筋縄では行かないようである。

少子化の進行に伴う人口減少によって、存続が困難になると予測されている自治体。「日本創成会議」人口減少問題検討分科会が、2040年までに全国約1,800市町村のうち約半数(896市町村)が消滅する恐れがある、と発表した。(2014年5月：通称「増田レポート」)

私の郷里・富山県では朝日町(人口：約1万人／森林面積85％／高齢化率42％)が消滅都市の“指定”を受けた。

この町は、貨幣的価値(大きな企業はない)や文化的価値(コンサートホールはない)は県内他市町村に比べ劣勢であるが、環境的価値(白馬連峰～里山～里海)や人間関係的価値が自慢である。そして、この町の標語・キャッチフレーズが「消えてたまるか！朝日町」である。

増田レポートを機に奮起した町民は様々な活性化運動(地元産の商品化、公民館活動の復活など)を行っており、少しずつではあるが、移住者が年々増加している。かつ移住者はすべて若者である。

彼らに移住を決意させた理由は「元気な、(彼らに言わせると)カッコイイ、ジィジィ、バァバァが一杯いた」ことだ。世話好きの方々が多く、いろいろと相談に乗ってくれ、応援をしてくれるとのこと。そんなことをやってもしょうがない！あれやるな！これはダメ！との注文は一切付けないとのことだ。

かつて、田舎の人間関係の複雑さや“ねっとり感”は若者を都会へと駆り立てる一因となったが、その反省を踏まえて？の“さわやか感”や“躍動感”を感じさせる新たな人間関係的価値の創造が功を奏しているようである。

将来、農山村に暮らしたいと考えている60代、70代の熟年層は20%、20代、30代の若者では50%とのNHK他の調査結果がある。この若者の志向は東日本大震災以降、増加傾向にあるという。かつて地方から東京に出た世代は都会での永住を決め込んでいるが、その子供たちの農山村志向、つまり“孫ターン”が増えてくるとの指摘がある。

成熟社会を迎え、生き方の物差しが我々の世代とは異なり多様化してきている。いろんなことがきっかけでその土地に惚れた若者の中には、その地で自ら創業し雇用を生み出す変わり者も出てきている。

全国各地の農山村の実情に向き合い、地域の人々の声に耳を傾けてきた明治大学教授 小田切徳美氏は「都市農村共生社会の創造」を提起している。

同氏によれば、戦後の高度成長期以来続いた「キャッチアップ型の開発主義」からの脱却という非常に大きな流れの中で「田園回帰」の変化があり、分水嶺・分岐点にきているという。また、地域の価値をネガティブに捉え、人の悪口や陰口などに終始している農山村・地方には、移住者は行かず、“地域の価値”に気付いたところに移住者が入ってくるという。

国家や地域、人は本質的には多様である。経済効率や経済成長を優先するあまりに、多様であるべき文化や価値観があくなき利潤を追求するグローバル市場になぎ倒され、様々な矛盾が顕在化してきているのではないか？地方創生や一億総活躍、女性活躍などの目的が経済再成長を促すためではなく、それぞれが、かけがえのない人生を送れる価値観（多様な座標軸）を持てる国へと豊かさの質を転換するための方策であってほしいと思う。

成熟社会は一見、多様化を実現しつつあるように見える。

しかし、それが目先の経済的な損得に重きをおいた無味乾燥な「個人化」の進展であれば、幸せとはほど遠い社会が到来する。

多様な価値観とは何でもありではない。それぞれの判断で人生を設計し、それぞれの責任で歩まなければならない。それは決して容易なことではない。これまで先人たちが力を合わせて築き上げてきた智慧から学ぶことの大切さを思い起こしつつ、社会全体での約束事（利他心／道義心）を土台とし、そのうえで個々人の価値観を際立たせることができる社会を目指すべきではないだろうか。

まさに“多様性”が地方創生の追い風になるような気がする。期待もこめて。



涅槃団子作り（中央が筆者）



囲炉裏体験学習（黒部市農村文化伝承館）